

第35回 福島県建築文化賞 各作品賞 講評

正賞（1作品）

○ 矢吹町営 中町第二災害公営住宅【矢吹町】

中町第一災害公営住宅、第一区自治会館、小学校や児童公園などの周辺施設を繋ぐコミュニティ・パスを受け止める外部空間と居住空間を緩やかに繋ぎ、被災した入居者が孤立せず、まちにとけ込むことを可能にしている。

敷地の高低差を活かし、住棟と外構が一体となったランドスケープ・デザインが行われ、地域に開かれた緑豊かな共用空間は近隣住民も散策などを楽しむことができる。それに面して透明感のある住戸が配置されており、「通間」と呼ぶ居間・居室、「縁にわ」と呼ぶサンルームを持つ各住戸は南北に空間が抜け、壁一面の窓により、見通しが良く、風が通り抜ける気持ち良い空間となっている。

準賞（1作品）

○ 矢祭町立矢祭小学校【矢祭町】

切妻屋根が連なる外観が周囲の景観に調和し、印象的である。内装に地場産木材を多用し、天井面に貼られた杉板材と照明が心地良いリズム感を生み出している。ゆとりあるメディアセンターを中心に、クラスルーム・ワークスペース・テラスを組み合わせた学年ユニットと特別教室等が配置され、学校生活に一体感をもたらすと同時に、進級とともに眺望が変化するように考えられている。

国道からグラウンドに向かって校舎を貫く大階段とピロティで構成される「朝日のみち」と名付けられたアプローチは、ここに通う子供たちの心象風景にいつまでも残ることであろう。

優秀賞（3作品）

○ 二本松市城山市民プール【二本松市】

霞ヶ城公園に隣接することから、外壁を城壁に見立ててデザインするとともに、敷地の高低差を利用し建物のボリューム感を抑えるなど、この場所ならではの設計がなされている。

内部は、樹木のような鉄骨柱と木造屋根から木漏れ日のような光が降り注ぎ、明るく広々としたプールときれいにまとめられたインテリアに彩を添え、温かみのある空間となっている。

屋根の木造梁現しの架構など、これまでのプールの概念を超えて、多世代が集う場として明るく心地良い親水空間を生み出している。

○ 郡山ヘアメイクカレッジ【郡山市】

4つの木造建物の中に3つのRC造部分を巧みに挟み込み、木造ならではのシンプルなフォルムと色彩を演出している。周辺との調和を図るべく派手さを押さえたデザインが落ち着きと好感をもたらしている。内部は木造ならではの温かみのある学び心地の良い空間となっている。

大空間を実現するために、木造ラーメン構造とCLT壁構造を組み合わせた新工法の工夫により、県産杉材のCLTやカラマツの集成材を活用する試みとして、今後の発展が期待される。

○ 白河文化交流館「コミネス」【白河市】

隣接する図書館との調和を図った大屋根の重なりが、白河駅を中心とした小峰城を望む再開発地域の落ち着いた景観形成に寄与している。

城下町をモチーフとし「カギガタモール」と名付けられた折れ曲がった共用通路に面して大小2つのホールを配置し、地域活動にも利用できる楽屋や練習室、自由に過ごせるアルコーブやコーナーを設けることにより、市民にとって開かれた交流空間となっている。

建築主の一貫性のある構想と、それに応えた設計者のコラボレーションがここに成果となって表れている。

特別部門賞（3作品）

○ 作左エ門【福島市】

築 150 年の古民家を、元の建物の趣を残しつつ、庭を整備し環境を整えながら、蕎麦店として生まれ変わらせている。テラスや増築した茶房などと合わせ、周辺の緑と調和し、四季を感じることのできる場を提供している。内部は、当時の住まい方を尊重しながら建築主の趣向が活かされ、昔の生活を未来に伝える効果が期待できる。空き家の利活用として、一つのモデルケースとなっている。

○ 大正ロマンの館【矢吹町】

東日本大震災による被害で解体の危機に瀕していた大正時代の築 100 年の建物が、住民・行政・大学などの働きかけで、カフェ兼集会所として甦った。建築の価値を見定め、取り壊さずに公共施設とした英断は評価に値する。

オリジナルのデザインを尊重しながら再現が図られ、耐震改修方法にも心遣いが感じられる。

町民も訪問者も、ここが歴史ある街並みであることを感じられ、今後はさらに周辺の建物と一緒にあって、新たな街並み形成の核となることが期待される。

○ びわのかげ屋内運動施設 こども投球練習場【南会津町】

地材地建を追求し、地元工務店が製作を担当した杉角材の縦ログパネルを用いて、小さいながら存在感のある建物となっている。足元から頂部に向かって壁が外に傾いており、架構の角度線が投球練習の時に圧迫感を感じさせない広がりのある内部空間と、印象的な形態を演出している。

縦ログパネル活用は、木を用いた循環型社会の形成や、地元の林業や工務店などの地域産業を支える可能性を持つと考えられ、今後の発展が期待される。

復興賞（3作品）

○ 半勝陶器店 勝義窯【大玉村】

シンプルで開放感のある木造の店舗兼制作アトリエである。相馬焼の窯元たちは、震災により散り散りになり、地元への復帰も難しい状況にある。各窯元と互いに連携し切磋琢磨しながら相馬焼の伝統を守り、新しい陶芸に挑戦する拠点にしたいという建築主の思いを受け、それを形にしようとした設計者の情熱が伝わってくる。相馬焼の特徴である透かし二重焼きを意識した軒下空間と店舗工房部分のダブルスキンの平面計画、登り窯をイメージした緩い傾斜屋根などが、店内の作品を生かす棚や調度品のデザインと一体になって、心地良い空間を生み出している。

○ 南相馬 みんなの遊び場【南相馬市】

震災・原発事故で外遊びができなくなった子どもたちのための屋内砂場施設である。サーカスのテント小屋をイメージした緩やかなカーブを描く大小二つの屋根が寄り添い、親しみやすい形状とスケールを持つ。内部空間は上り梁にリング状の梁が何層にも重なり合ったリズム感のある木組みが特徴的で、力強さがありながら楽しい空間を生み出している。内部は中央のトップライトからの自然光が木の温かな色味を強調し、開放感のある心地良い空間となっている。

○ からすや食堂【いわき市】

「町のために何かしたい」という建築主の思いから、津波により全壊した老舗食堂が、食事を提供しつつ地域に開いた公共性のある空間として再建された。

地域の舟小屋のデザインをモチーフにした切妻屋根のシンプルな木造建物で、地域の復興の一つのシンボルとして小さいながらも存在感があり、関係者の復興に向けた思いを感じさせる。

木造トラスの屋根は、地元の材料と職人で施工できるよう簡易化を図り、北側棟部にトップライト、妻側外壁にハイサイドライトを設けて、地場産木材と食堂に集う人々を光で照らす。

（※優秀賞、特別部門賞、復興賞については順不同）